

小野恭靖著『韻文文学と芸能の往還』

永池 健 二

古典文学における歌謡研究の難しさは、歌謡が、言語によつて表現された文芸であると同時に、一定の場において一定の曲節をもつて音声によつて表出される一回限り「場」の芸能であるという事実根ざしている。今日伝存している歌謡のテキストのほとんどは、そうした芸能として歌われた歌謡の言葉や文字によつて書き留めたもので、その歌詞と不可分であつた曲節も、歌われた場の状況も伝えることはない。わずかに残された「譜」も、中世以前のものは、その大要ですら解説は難しい。畢竟、研究者は残された文字資料のみを手掛かりとして、様々なアプローチを模索しつつ、芸能としての歌謡の全体像にせまるといふ苦しい試みを強いられる事になるのである。

本書は、そうした歌謡の研究を古典文学研究の立場から精力的に進めてきた著者の最新の研究成果を収めた第四冊目の本格的な研究論集である。古典文学研究の正統の立場から主として和歌文芸研究の延長上で歌謡研究を進めてきた著者が、着実な研究の積み上げによつて獲得した成果と、歌謡研究の前面を拡大しその可能性を増幅させるような新しい試みや提言が、随所に収められている。

本書は、「Ⅰ論考編」と「Ⅱ資料編」の二部より構成され、論考編は、さらに四章に分かれたれ、計二十八編の論考が収められている。第一章は、「韻文文学の交流」と題され、「催馬楽独自の歌ことば」を始めとして、「和歌・狂歌と室町小歌」、「良寛の歌謡と和歌」など、わが国の韻文文学の二大種目である和歌と歌謡との交渉交流を主たるテーマとした十編の論考が、第二章「韻文文学と音楽の交響」では、和歌、歌謡という韻文文学と音楽との関わりを、通史的に捉えようと試みた「子どもを歌う歌謡史」、「音の歌謡史」など六編を収める。第三章「中世歌謡と芸能の周辺」、第四章「近世歌謡と芸能の周辺」は、それぞれ、室町小歌や近世の流行歌謡とその周辺の諸芸能について論じた「室町小歌の音楽」や「物売り歌謡研究序説」など、前者に五編、後者に七編の論考を収める。こうした著者の広範かつ多岐にわたる論考のすべてを逐一、紹介、批評するのは、きわめて難しく、また評者の任でもない。ここでは、あえて評者の関心にしたがひ、著者の研究の成果を概括的におよそ以下の三点にしぼつて、その意義と可能性を指摘しておきたい。

歌謡文芸の裾野は広い。歌謡は、一部の特権的な人びとだけに享受される文芸ではないから、その記録は、様々の機会に多様な形で残されており、なお歌謡資料として登録されないまま眠っているものも少なくない。著者は、早くからそうした未発掘・未登録の歌謡資料を探索発掘し、厳正な校訂を加えて提示するという作業に意をそそいできた。本書においても、そうした新資料の発掘紹介という歌謡研究の基盤となる一連の仕事をその第一の成果

として掲げなければなるまい。

伝法守法親王筆の声明切「真光院切」三種を始めとして、仏教歌謡関連の古筆切を紹介翻刻し位置付けた「仏教関連古筆切資料考」(第二章第五節)。室町小歌から近世小歌への変容、転換の過渡期の実情を示す新資料として価値の大きい『美楊君歌集』の全文を翻刻紹介し、その性格を多面的に検討して歌謡史の上に位置付けた「美楊君歌集」小考(第三章第五節)。近世期禪僧らによって創作編集され、流布した、宗教的、道德的な教訓を詠み込んだ「道歌」―教化歌謡―について、新資料を翻刻紹介し、その成立や普及の跡を広く精査した「二休和尚いろは歌」小考(第一章第七節)。「古月禪材」いろは歌「研究序説」(同第八節)。「道歌心の策」小考(同第十節)。これらは、いずれも地道な資料への目配りによって、未知の歌謡資料に光を当てる貴重な試みである。また、第四章第三節以下の「物売り歌謡研究序説」「物売り歌謡統考」「おもちゃ絵の歌謡考」「おもちゃ絵の歌謡統考」の四編も、歌謡研究の前面を広げる貴重な仕事である。前二者は、室町後期から近世にかけての物売りの売り声を、歌謡研究の立場から集成整理しその特質を論じたもの。後二者は、子ども向けに発刊された「おもちゃ絵」に記された様々な伝承童謡ややはり歌の断片に着目し、「絵」を伴った歌謡資料としてその意義を捉え返したものである。いずれも、これまで歌謡研究において見落とされてきたジャンルで、今後の研究の展開が期待される。

師藤平春男氏の薫陶を受け、和歌の文学的研究の影響下にその歌謡研究をスタートさせた著者にとって、和歌やその周辺の文

芸、芸能との関わりを通じて歌謡の文学的、文芸学的解明を進めるのが、当初からの最も大きなテーマであったとおもわれる。本書でも、和歌に詠み込まれた催馬楽出自の歌ことばを手掛かりに催馬楽の表現を論じた「催馬楽出自の歌ことば」(第一章第一節)、平安後期の歌人顕昭の『袖中抄』、「六百番陳状」所載の催馬楽関係記事から催馬楽の表現やその成立事情を検討した「和歌と催馬楽」(同第二節)、「院政期の催馬楽」(同第三節)、「閑吟集」の小歌と同時代の和歌や狂歌との関わりを、詳細かつ具体的に論じた「和歌・狂歌と室町小歌」(同第六節)などは、そうした方法と関心の延長上の成果であり、資料の取扱い方も行論の手際も手堅いものである。

一方、第二章第三節「子どもを歌う歌謡史」、第三章第三節「朝川」考の二編は、どちらも、従来の文学的歌謡研究を踏まえながら、著者の歌謡研究の新しい展開を予感させる好論である。前者は、狂言歌謡に見える「七ツニ成ル子」、念仏歌の「七つ子」などの表現に着目し、民俗学や歴史学の成果を援用しながら、子どもの成長過程における境界的年齢である七歳や十三歳が、歌謡の表現においても格別な意義をようになっていたことを指摘したものの。後者は、『宗安小歌集』一五二番歌「十七八はあさ川渡る」の表現について、川の浅瀬の意とする従来説に対して、万葉歌から、近世、近代の民謡や踊歌の用例も積み重ねて、「朝川」であることを論証する。いずれも、一首の歌謡の中のわずか一句の表現を取り上げたものだが、周辺諸科学の成果や、他の歌謡芸能資料も巧みに活用し、一首の歌の背後にある民俗的、生活史的背景

を抽出するのに成功している。

本来、音声によって表出され、口から口へと口承によって伝えられていくべき歌謡が、文字によって書き留められ、歌謡資料(テキスト)として残される。そこにどのような事情が介在し、またどのような問題が生じてくるのか(第二章第一節「口承と書承の間」)。テキスト間の歌謡詞章の異同は、どのようにして発生するのか。テキストの性格による記載法の差異、「異伝歌」や「替歌」の存在をどのように捉えればよいか(同第二節「歌謡の生態とテキスト」)。今日、テキストという視覚化された文字資料、著者のいう「冷凍保存された歌謡」を通してしか古典時代の歌謡に接することのできない私たちにとつて、こうしたテキストを相対化する視点は不可欠のものであるが、なぜかこれまで歌謡研究の現場においては長い間閑却されてきた。本書によって提示された研究の第三の成果は、こうした一回的な「場」の芸能としての歌謡という表現形式のあり方そのものに関わる積極的なアプローチの中に見ることができる。

著者は、第二章第六節「音の歌謡史」、第三章第一節「室町小歌の音楽」の二論では、音声表現としての歌謡の音楽的側面について論じ、前者では、歌謡の曲節を書き記した「博士譜」や「胡麻譜」の問題、伴奏楽器、テンポ、音数律、囃子詞などの問題を総合的に取り上げ、後者では、新出の室町小歌資料『美楊君歌集』に付された胡麻点を手掛かりに、室町小歌の音楽的側面についての考察の見通しを提示する。「近世流行歌謡をめぐる諸問題」(第四章第二節)においては、尾張熱田の遊里神戸町で歌われた神戸

節を取り上げ、「流行歌謡と民謡はどのような関係にあるのか」という問題意識の下に、類歌の分布や用語の比較検討を通じて、神戸節諸歌謡の「空間的伝播力の強さ」を指摘し、その歌謡の流行歌謡の性格を強調している。歌謡研究にとつて民謡と流行歌の問題は、古くて新しい問題である。柳田国男が、両者を相剋する相容れない存在と規定したのに対して、両者を敵対的なものではなく、相互に浸透交替が可能な「相つながら一本の線の如きもの」と考えたのは、藤田徳太郎であった。個々の歌謡の「空間的伝播力」を重視し、「民謡」と「流行歌」の相互乗り入れの事実を重く見る著者の立場は、この藤田の立場に近いものといえよう。

これらの諸論考は、当初、歌謡の文学的、文芸学的研究を志した著者が、その研究の着実な積み重ねと深まりの中で、あくまでその重心を文学的研究に置きながらも、一回的な音声表現、音の芸能としての歌謡の表現構造のあり方全体にその関心を広げ問題意識を深めていることを明確に示している。著者の関心のこうした広がりや深まりを、同じ歌謡研究を志す同学の一人として何よりも喜びたいと思う。

なお第二部「資料編」には、『美楊君歌集』の本文と総索引に加えて「弄齋節」「投節」「せんだい節」など七種に及ぶ近世流行歌謡の本文と各句索引が掲げられている。著者がすでに編集刊行している『近世流行歌謡 本文と各句索引』(平成十五年 笠間書院)を補完するもので、近世歌謡の研究者だけでなく、歌謡資料を活用する多くの研究者にとつて有益である。

(二〇〇七年二月 和泉書院 A5判 六七二頁 税込一六八〇〇円)